

論文（査読付）

「私」の「不安」を巡る物語

—三島由紀夫『仮面の告白』論—

上田 茜^{*1}

A Study on the "fuan" of the Protagonist "I" in Yukio Mishima's Confessions of a Mask

UEDA Akane

Abstract

A Study on the "fuan" of the Protagonist "I" in Yukio Mishima's Confessions of a Mask. "fuan" is the most prominent emotional depiction of "I" and can be observed in 22 scenes across Chapters 1 to 4. This study classifies "fuan" into "night-soil-man," "Maid of Orleans," and "soldiers' sweaty odor" types to analyze its causes. It can be understood that these arise in scenes of establishing sexual relationships or those involving death. The various "fuan" stem from the protagonist viewing his carnal attraction to men as a sin; thus, his "confession" serves as a penance to beg for forgiveness. Ultimately, Confessions of a Mask is a narrative centered around "fuan."

はじめに

『仮面の告白』は河出書房の企画「第5回書き下ろし長編小説」^{*2}として昭和24年7月に出版された作品である。それまでも短編小説を中心に執筆をしていた三島由紀夫が、勤めていた大蔵省を辞め、専業作家として執筆した最初の長編小説であった。川端康成をはじめ6人の選者が1949年読売ベスト・スリー^{*3}に推薦しており、発表当時の評価が高かったことが窺える。三島は作品について「内心のエロスに委ねて、思いきつて自由に書きたいことを書いてみた」^{*4}と述べ、作品のクオリティーに満足していた。

作品は主人公の「私」が、生まれた瞬間から20代半ばまでの人生を振り返った叙述形式となっている^{*5}。1章から4章までで構成され、1章では幼少期における自己の形成に関する前提を語り、2章は中学生時代について語られる。初めての自決、「私」の言葉を借りるなら最初の「悪習」が起きたこと、初恋相手である同級の男子学生、近江に対する心情が展開された。3章は太平洋戦争中にあたり、そのなかで園子という女性に出会い関係を結ぼうと奔走する姿や女

たちに翻弄される姿が見られる。4 章では終戦を迎え、戦争による死の希みが絶たれた「私」が、女と性的関係を結ぶために奮闘する姿や人妻となった園子との逢引、そしてそれらが「不可能」に終わることが描かれている。

作品が発表された 1949 年から 1950 年代における多くの先行研究^{*6}では「私」の倒錯心理や異常性欲の 2 点が注視されていた。その後も引き続き、倒錯心理や異常性欲に注視しつつ主流となった論調は、「私」を三島の実体験（人生）と重ね合わせた作家自身の自己分析にすぎないというもので、殊に作品のタイトルである「仮面」の存在について多くの場合述べられている。近年では、武内佳代が作品発表時代の男性同性愛の言説を辿ること^{*7}や平野啓一郎は性的指向と恋愛指向の不一致^{*8}を細かく整理している。

『仮面の告白』において多くは作家論に終結しており、「私」というキャラクターの解釈には未整理の領域が残されていると考えられる。従来のように作家の実人生をもとにして、「私」というキャラクターにどのようなパーソナリティーが付与されたのかを解釈するのではなく、作品内の描写から「私」のパーソナリティーを解釈していきたい。そこで本稿では、「私」の心情描写のなかで極めて多く認められる「不安」に着目していく。どのような「不安」がいつ発生し、「私」に作用するのか、分析をおこなう。「私」にまつわる「不安」は、作中 22 回という高い頻度で描出された。「不安」があらわれる場面を抽出し、それぞれを具に検証することで「私」のパーソナリティーについて明らかにしていく。それは多く、“大人になること”、“近江（＝同性＝男）”との関係、“園子（＝異性＝女）との関係”、“死ぬこと”へ意識が向く場面で、あらわれることになる。

なお当該の「不安」は「私」にまつわる場面に限定する^{*9}ものとした。

1. 物語を支配する「不安」

1 章の冒頭で「私」は、自己の形成に関する前提を語った。それは以下の通りである。

かうして私は二種類の前提を語り終へた。それは復習を要する。第一の前提は、糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂ひとである。第二の前提は、松旭齋天勝とクレオパトラだ。／なほ語られねばならない前提が一つある。／（中略）執拗に、「殺される王子」の幻影は私を追った。 189 頁－190 頁

「第一の前提」としては「糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂い」が語られ、「第二の前提」では、松旭齋天勝とクレオパトラから扮装慾について、3 つ目にあたる前提は「殺される王子」^{*10}について述べられた。このように「私」は 3 つの前提を語るが、そのなかでも「第一の前提」である「糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂い」に注目していきたい。それは、「第一の前提」が「私の生涯の不安の総計のいはば献立表」だからだ。

私の生涯の不安の総計のいはば献立表^{メニュー}を、私はまだそれが読めないうちから与へられてみた。私はただナプキンをかけて食卓に向かつてゐればよかった。今かうした奇矯な書物を書いてゐることすらが、献立表にはちゃんと載せられてをり、最初から私はそれを見てゐた筈であつた。 185 頁

「私」が 5 歳の頃には「生涯の不安の総計」を与えられており、これは 20 代半ばまでの「私」の人生において必然であつた。「第一の前提」である「糞尿汲取人とオルレアンの少女と兵士の汗の匂い」という「生涯の不安の総計」は、作品の冒頭から終わりまで一貫して見られた。「不安」の発生には「第一の前提」が基にあり、それぞれ分類することができる。これらについては次章で詳細に述べていく。“大人になること”、“近江（＝同性＝男）”との関係、“園子（＝異性＝女）との関係”、“死ぬこと”へ意識が向く場面で「不安」はあらわれ、「私」は「不安」が「私」だけが抱える感情だと理解している。「私」だけという意識は疎外感を育て、その疎外感を伴った「不安」に支配されていく。そして、その「不安」について「私」が叙述することは、「献立表にはちゃんと載せられて」いたことから当然であつた。『仮面の告白』は「不安」を巡る物語といえるだろう。

2. 「不安」の萌芽— 「糞尿汲取人とオルレアンの少女と兵士の汗の匂い」

「私」の自己を形成した「糞尿汲取人とオルレアンの少女と兵士の汗の匂い」について、「糞尿汲取人」、「オルレアンの少女」、「兵士の汗の匂い」それぞれがどのような現象か詳しく見ていく。まず、はじめに「糞尿汲取人」並びに「汚穢屋」は、5 歳の「私」が「だれか知らぬ女の人に手を引かれ」自宅近くの坂を上っていたとき、反対から下ってきた若者であつた。彼の姿は「不当な精密さを帯びて」おり、「私の半生を悩まし脅かしつづけ」る。そんな彼は「汚れた手拭で鉢巻をし、血色のよい美しい頬と輝やく目を」持っていた。そして彼の「紺の股引」に惹かれ、『私が彼になりたい』といふ欲求、『私が彼でありたい』といふ欲求が私をしめつけたのである。

それから「私」は、「糞尿汲取人」・「汚穢屋」という職業から「悲劇的なもの」と「身を挺している」という感覚を受け取った。その点について佐藤秀明は、「悲劇的なもの」と「身を挺している」という言葉に注目し、この 2 つからあらわされる感覚を「前意味論的欲動」*¹¹と名付けている。それは、「言語化し意味として決定される以前に遡ることになる体験や実感に表れた、何ものかに執着する深い欲動」*¹²だという。佐藤が指摘する「何ものかに執着する深い欲動」が「私」に起こるとき、とりわけ“大人になること”、“近江（＝同性＝男）”との関係、“園子（＝異性＝女）との関係”、“死ぬこと”に執着したとき、また「不安」も生じるのではないだろうか。そして「悲劇的なもの」について「私」は以下のように定義している。

私の官能がそれを求めしかも私に拒まれてゐる或る場所で、私に関係なしに行はれる

生活や事件、その人々、これらが私の「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれてゐるといふ悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられて、辛ろうじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与らうとしてゐるものらしかった。／とすれば、私の感じだした「悲劇的なもの」とは、私がそこから拒まれてゐるといふことの逸早い予感がもたらした悲哀の、投影にすぎなかつたのかもしれない。 181—182 頁

「私」が幼少期に目にした「糞尿汲取人」・「汚穢屋」の「紺の股引」という明瞭に輪郭つけられた下半身を通じて感じた、「悲劇的なもの」と「身を挺している」感覚は、「私」が抱える「不安」の出発点と言えるだろう。ここでの「不安」は、「私」が性的魅力を与えられた対象に自分になることができないと自覚し、また拒まれてゐるという感覚のことである。原点にあるのは、男性らしい男性に肉欲を抱く「自分」が、同性愛嫌悪の瀰漫する社会に受け容れられず、異常者・逸脱者として指弾、白眼視されるのではないかという思いである。それは同時に、規範的・性的な魅力を備えた「男性」に自分はなれず、そうした男性に欲情する「女」の立場なのかもしれないという自覚から来した不安でもある。

この状態の「不安」を“汚穢屋の不安”としたい。

次に「オルレアンの少女」についてである。その存在は「一日その絵に見入つてゐられる生活がしたい」ほど魅せられた絵本の中の 1 枚であり、「白馬にまたがって剣をかざしてゐるジャンヌ・ダルク」のことであつた。「私」は少女を「美しい顔」の男の子だと思い、また殺されることを期待していた。しかしそれは、看護婦の言葉により裏切られる。「私」が信じていた者は、男のフリをして戦争に行った女だつたのだ。それを知つた「私」は打ちひしがれるのである。

私は打ちひしがれた気持だつた。彼だと信じてみたものが彼女なのであつた。この美しい騎士が男でなくて女だとあつては、何にならう。(中略) それはとりわけ彼の死に対して私の抱いた甘い幻想への、残酷な復讐、人生で私が出逢つた最初の「現実からの復讐」に似てゐた。 183 頁

そして「私」は「絵本を見捨て」る。「私」が信じていたものが真実ではなかつた。「オルレアンの少女」の場合「彼」が「彼女」であつたことは、「私」と信じていた対象との齟齬を「私」が裏切りとして認識していると理解できる。「絵本を見捨てた」に至るほどの感情を与えた「現実からの復讐」とは、自己の欲望が社会的規範に合致しないことからくる不安であり、これを“オルレアンの少女的不安”としていく。

最後に「兵士の汗の匂い」について見ていきたい。

汗の匂ひである。汗の匂ひが私を駆り立て、私の憧れをそそり、私を支配した。……
184 頁

「私」の記憶に残る「汗の匂ひ」の正体は兵士であり、訓練から帰ってくる彼から空の葉莢をもらうことを楽しみにしていた。この出来事に「秘密のよろこび」が伴うようになっていくのは、危ないからと祖母に禁止されていたというだけではなく、「かれらの汗の匂ひ」が要因であった。

兵士たちの汗の匂ひ、あの潮風のやうな・黄金に炒られた海岸の空気のやうな匂ひ、あの匂ひが私の鼻孔を搏ち、私を酔はせた。私の最初の匂ひの記憶はこれかもしれない。その匂ひは、もちろん直ちに性的な快感に結びつくことはなしに、兵士らの運命・彼らの職業の悲劇性・彼らの死・彼らの見るべき遠い国々、さういふものへの官能的な欲求をそれが私のうちに徐々に、そして根強く目ざめさせた。 184—185 頁

「汗の匂ひ」はいわゆる男らしさを象徴し、戦争に行くことができる兵士たちに対して憧れるとともに「官能的な欲求」を「私」は幼いながらに持っていた。つまり、軍国主義下の男性性称揚と国家にとって異質な要素を排除する雰囲気も後押しし、男らしさが垣間見えた相手に湧いた肉慾的なものを「不安」と捉えることができるだろう。同性（＝男）に対して肉慾が湧いてしまったことが、自分が社会の異常者なのではないかと意識したときに発生する「不安」を“兵士の汗の匂ひ的不安”としたい。

前述した「第一の前提」、「糞尿汲取人とオルレアンの少女と兵士の汗の匂ひ」から生じた感覚をそれぞれ、汚穢屋的不安”、“オルレアンの少女的不安”、兵士の汗の匂ひ的不安”と仮に定義しておく。

以下、“汚穢屋的不安”、“オルレアンの少女的不安”、兵士の汗の匂ひ的不安”この3点を軸に、「私」の中でいつ「不安」があらわれているのか、章ごとに辿り、分析する。

3. 「不安」の変遷を辿る

1 章

その美味は私に大人の資格がまづ一つ与へられたことを意味してみたが、いつもそれを感じるたびに居心地のわるさをおぼえる一つの不安—「大人になることの不安」—の重みをも、やゝ苦く私の舌先に味はせずには措かなかつた。 194 頁

体が弱いことを理由に両親と離され祖母のもとで過保護に育てられた「私」は、遊び相手は祖母が選んだ女の子、外遊びは禁止、食事も厳しく白身魚や裏ごしされたじゃがいも、お菓子はビスケットなどの干菓子、フルーツは薄く切られたものと管理されていた。そんな「私」が禁止されていた青魚をはじめて口にしたのは、従妹の家に遊びに行ったときであった。「大きくなった、大きくなった」とおだてられながら食べた青魚はおいしさと同時に、『大人になることの不安』—の重みをも、やゝ苦く私の舌先に味はせ」たのである。

「私」は家の外で「一人の『男の子』であることを要求され」ていた。それは健康で丈夫な

身体を持ち、国のために戦うことができる、幼い「私」に菓莢をくれた兵士のようなものであろう。また、「戦死したり殺されたりしてゐる状態を空想することに喜びを持つ」ていた。「私」は戦死することに憧れていた。しかしながら、それは幼い「私」からすれば「大人」にならないと実現できないことである。また、「私」は憧れているが自分がそうはなれないことも理解していた。

「私」は成長していく過程で「大人の資格」が与えられる。そのとき「居心地のわるさをおぼえる」のは、自分が「大人」になれるはずがないと思っているのにも関わらず、一方的に資格が与えられたからである。それゆえの「大人になることの不安」であり、病弱であるため自分は大人になることができないという、拒まれている感覚であった。ここでの「不安」を“汚穢屋的不安”とする。

2 章

……見てゐるうちに、ふとして私は不安に襲はれた。居ても立つてもゐられない不可解な不安であった。遊動円木の揺れ方から来る目まひに似てゐて、さうではなかつた。いはば精神的な目まひ、私の内なる均衡が彼の危ふい一挙一動を見ることで破られかかる不安かもしれなかつた。この目まひのなかにはなほ、二つの力が覇を争つてゐた。自衛の力と、もう一つはもつと深く・もつと甚だしく私の内なる均衡を瓦解させようと欲する力と。この後のものは、人がしばしば意識せずにそれに身を委ねることのある・あの微妙な・また隠密な自殺の衝動だつた。 223—224 頁

学校の校庭で近江とクラスメイトたちとの場面である。まず近江という男は「私」の初恋相手である。中学二年生のときに出会った彼はすでに 2、3 回落第しているいわゆる不良者で、女と交際経験があると噂されていた。骨格は秀で整った顔立ちをしており、制服の着こなしも校則を守らず、「白絹のマフラーと、派手な模様入りの靴下を」身に付けるような人物であった。

近江に対する記憶は「二つの手袋」が印象的である。1 つ目の手袋が、雪が降った冬の朝誰もいない校庭で近江が差し出した「革の手袋」である。このとき「私」が近江から「革の手袋」とともに受け取ったのは、「肉の欲望にきずなをつないだ恋」であり、彼の下半身の「大きなもの」を見たいという欲求であった。

そして「不安」を伴う 2 つ目の手袋は式日に着用する「白い手袋」である。学校内の「冷酷なおたのしみ」であった校庭の遊動円木^{*13}から地面に落としあうゲームに無双する近江の手には、「白い手袋」がはめられていた。魅力を感じている「私」は彼の手を追いつけてしまい、「不安に襲われ」と同時に彼を美しいと感じていた。

近江の身体に魅せられた「私」は慾、すなわち性的欲求を感じている。そのため、このときの「不安」は“兵士の汗の匂ひ的不安”といえるだろう。「居ても立つてもゐられない不可解な不安」のなか、彼の存在を傍観するのではなく、「白い手袋」をはめている彼に勝負を挑み、互いに遊動円木からころがり落ちた、そのとき、触れた近江の指の感覚や泥汚れ、愛しているという自覚とともに近江という存在に傾倒していくのだ。

しかしながら私の最初の恋が、どのやうな形で終末を告げるかを、おぼろげながら私が予知してゐない筈はなつた。ともするとこの予知の不安が、私の快樂の核心であるのかもしれない。 229 頁

生まれつき身体が弱い「私」は、自分の身体が劣っていることを自覚していた。体格検査の場において、国家の求めるやうな身体に近江に自分の身体を見られないことに安心すると同時に「近江の裸体を見たい」と熱望するのだ。「革の手袋」の一件から、近江に肉慾的な恋をしており、それが初恋だと自覚している。季節が進み冬から夏になると近江の肉体を見ることができのでは、という期待と恐れが混ざった感情が湧いている。「私」の貧相な身体と彼の男らしい身体を比べ、そうなることはできないという感覚のもと、「不安」を抱いている。また近江（＝同性＝男）に向く愛情は同級生たちが持つ感覚からは逸脱しており、「終末を告げる」ことも理解していただろう。そのために“兵士の汗の匂ひ的不安”も見られる。

私にあつては、（このことは私を赤面させるのに十分だつたが）、彼の夥しいそれを見ただ瞬間から *erectio* が起こつてゐた。間服のズボンのこととて、悟られはすまいかと氣遣はれた。その不安がなくとも、とにかくこの時私の心を占めたものは無垢な喜びばかりではなかつた。（後略）／それは嫉妬だつた。 232 頁

ここからの分析にあたり「悪習」と「*erectio**¹⁴」について述べておく必要がある。

最初の「悪習」が起こつたのは、「私」が風邪で学校を休んだ 13 歳のときであつた。父親が隠し持っていた画集をいくつか取り出し、はじめてそれを目の当たりにした。そのなかの 1 枚が聖セバスチャン*¹⁵であり「私のために、そこで私を待かまえていたとしか思はれない」殉教図であつた。このとき起きたことが「私の最初の *ejaculatio**¹⁶であり、また、最初の不手際な・突発的な『悪習』だつた」のである。

目の前の聖セバスチャンは、「木の幹の刑架に白い布を腰に巻き付けただけの上裸の「美しい青年」で、上げられた両手は縛られ、「左の腋窩と右の脇腹」に 2 本の矢が刺さっていた。その存在を知ってからというもの「裸になるたびに自分の両手を頭の上で交叉させてみる癖がつくくらいに「私」は虜になっていた。「異教の香りの高いもの」だとし、他の聖セバスチャンの絵に見られるやうな「布教の辛苦や老朽のあとではなくて、ただ青春・ただ光・ただ美・ただ逸楽があるだけだつた」としている。そして「私の全存在は、或る異教的な歡喜に押しやるがされ」るのであつた。これが、「私」を苦しめた「悪習」のはじまりであつた。

近江の身体を見る機会がやっと訪れたのは、学校の体操の時間に彼が懸垂の手本を見せたためであつた。「私」が見た聖セバスチャンと同じポーズともいえる腕を上げた近江の腋窩には、「夥しいそれ」、「ほとんど不必要かと思われるくらいの・いわば煩多な夏草のしげりのような毛」が生えていたのである。自分との明らかな違いを目にした瞬間、「私」に「*erectio* が起こっていた」。「その不安」とは、男子学生という同性しかいない場で、「*erectio* が起こつたこ

とが知られることであり、「嫉妬」へと姿を変えていった。

近江の身体を見たいという願望が満たされ、「erectio」が起こるほどの肉慾を受け取ると同時に、自分は近江のような身体を得ることはできない自覚がより強く嫉妬というかたちで生まれている。つまりここでは、“汚穢屋の不安”と“兵士の汗の匂ひ的不安”への両方が見られた。

男女の恋や結婚といふものにあらゆる都雅な夢を託してみたのである。近江への恋を私は投げやりな謎の芥に投り込んで、深くその意味をたづねてみることもしなかつた。

（中略）私はかういふ欲望と私の「人生」との間に重大な関わりがあらうなぞとは、夢にも思つてゐなかつた。／それにもかかはらず、直感私の孤独を要求してみた。それはわけのわからぬ異様な不安、一すでに幼年時に大人になることの不安が色濃く在つたことは前にも述べた、一として現はれた。私の成長感はいつも異様な鋭い不安を伴つた。

（後略）未来に対する私の漠とした不安は、一方私の現実を離れた夢想の能力を高めると共に、私をその夢想へのがれさせる「悪習」へと狩り立てた。不安がそれを是認した。

233—234 頁

「私」にとって「erectio」は、「愛の・これ以上はない明白なしるし」であり、近江に恋し、愛していた証拠である。聖セバスチャンと近江の姿が重なり見えてきたのは、「私」が憧憬と嫉妬を抱えていることであり、それを起点に「異様な不安」が「私」に付いて回っていた。「都雅な夢」を託された結婚は、3章で園子と関係を築くうちに現実的な事柄だと理解していく。

瞬間的かつ突発的に起こる「erectio」が「悪習」に繋がるが、その要因を「不安」、「兵士の汗の匂ひ的不安」のためであると認識することにより、近江に対して起きた「erectio」と「悪習」は幼い頃に与えられた「献立表」に載っていたため、を当然だと肯定したのである。

風呂に入るとき、私は永いあひだ鏡の前に立つやうになつた。（中略）私の肩がいつか近江の肩に似、私の胸がいつか近江の胸に似るであらうといふ期待を、目の鏡が映してゐる・似ても似つかぬ私の細い肩・似ても似つかぬ私の薄い胸に無理強ひに見出しながら、薄氷のやうな不安は依然私の心のそこかしこに張つた。それは不安といふよりは一種自虐的な確信、「私は決して近江に似ることはできない」と神託めいた確信だつた。

235 頁

近江という存在は、幼い頃の「私」に映った「糞尿汲取人」並びに「汚穢屋」の姿であり、最初の「erectio」が起きた聖セバスチャンの姿であつた。とりわけ彼の肉体は、「私」が幼少期から憧れていたもので、身体の弱い「私」はそうした肉体をもつことはできないと卑下しているため、自分がどれだけなりたいたいと思つてもなれない対象であると理解していたのである。身体における肉の部分は似ることができないが、せめて腋窩の毛といった肉体の装飾にあたる部分は似ることを期待し、『近江と相似のもの』を愛するようになっていく。とりわけ軍国主義的な時代背景において自分にはなることができない近江に近づくことができない自覚から発生

した「不安」、「汚穢屋的不安」が見出され、それが確実なものとなる。

3章

私の不安が、私の不確定が、誰よりも早く意識の規制を要求したにすぎなかった。私の意識は錯乱の道具にすぎず、私の操作は不確定な・当てずっぽうな目分量にすぎなかった。 251 頁

この「不安」は「バスの女車掌」のどこがいいのかという話から、「私」が同級生が納得する答えをだしてしまったことに由来する。前述した近江とのエピソードからも分かるように、「私」は同性（＝男）に惹かれており、ただそれが社会的規範からは逸脱し、同級生たちにとって当たり前ではないことも理解していた。そのためわざと異性（＝女）のことを饒舌に語り、自分は皆となんら変わらないと振る舞う。饒舌に語っているものの、女と性的関係を結んだことはなく、また魅力も感じず、「先天的な羞恥をもつていな」かった。女に肉慾を感じる同級生たちとは反対に、「私」だけが同性（＝男）に肉慾を感じていることに「不安」、「兵士の汗の匂ひ的不安」を抱えている。

何の慾望もないくせに、その時になれば、突然、一まるで天外からの靈感のやうに、一私にも *erectio* が起るのだらうと思はれた。心の十パーセントが、「いや私にだけは起るまい」と低く囁きつけ、それが私のあらゆる形の不安となつて現はれた。 256 頁

「私の年齢の男の子」が女に感じていることを自分は感じていないことに、「私」は段々と焦りはじめる。しかし、ただ皆と違うことに焦るだけで、依然として女に肉慾を感じたこともなければ、性的関係も結ぼうともしなかった。だが「私」にとって「愛の・これ以上はない明白なしるし」である「*erectio*」が起きるかどうかが「人生へ出発」*¹⁷できるかにおいて重要なのだ。

「私」は「何の欲望もないくせに、その時になれば」女と性的関係を結べると認識していた。だが、熟考していくうちに自分は性的関係を結べないことを自覚していく。女を対象に「*erectio*」が起こるわけがない、そこに至ることができないという拒まれている感覚である。「汚穢屋的不安」が、今後「私」と園子が関係を築くにあたり障害となっていくのだ。

私は明確なプラトニックな観念を自分のうちに育てることを知らずにゐた。（中略）肉感に関する私の漠たる不安が、およそ肉の方面だけを私の固定観念にしてしまった。知識慾と大して逕庭のないこの純粋な精神的な好奇心を、私は私自身に「これこそ肉の慾望だ」と信じこませることに熟練し、はては私自身がほんたうに淫蕩な心をでももつてゐるやうに私をだまかすことに習熟した。それが私をして乙に大人ぶつた・通人ぶつた態度を身につけさせた。私はまるで女に倦きはてたやうな顔をしてゐた。 259 頁

「私」は当然知っているかのように女について語っていたが、それは全く知らない女の肉体について語っているのと同義である。近江に対し肉慾を感じながらも、「私の年齢の男の子」が抱くであろう女の肉の部分に関する感情を同級生に提供し続ける。また、その行動が「私」自身を律すると信じている。その結果、「私はまるで女に倦きはてたやうな顔をして」おり、1つの固定観念、接吻へと至る。この接吻は、私が園子を欲望できないという事実^{ミニユ}に私自身が直面する際に際強く現れる「不安」、「オルレアンの少女的不安」の布石となっていく。

この時代こそ私にとって唯一の愉楽の時代ではなかつたらうか。不安は在つても漠としたそれにすぎず、私はまだ希望をもち、明日はいつも未知の青空の下に眺められた。

261 頁

時代は戦争の渦中、「私」は20歳ほどで人生が終わると考えていた。戦死を願っているとはいえ、戦わずともどうせ戦争により死んでしまうと考えている。だからこそ「私」は与えられていた「生涯の不安の総計のいはば^{ミニユ}献立表」を蔑ろにしていた。

作品が叙述形式である点から見て、全ての「不安」が深刻なものとして捉えられるのは、20歳を過ぎ、戦後になってからである。

時として私がプラトニックな観念を信じてゐないやうにみえたのも、私に欠けてゐる肉感といふ観念へともすると傾きがちな私の頭脳と、大人ぶりたい病ひの満足に与りがちなあの人工的な疲れとのせみだつた。いはば私の不安からだつた。 271 頁

昭和19年、「私」が19歳の頃、園子という女に出会う。彼女は「私」の友人草野の妹で、最初の印象はピアノを弾いている美しい足を持った女性であるということだった。このピアノの音はここから5年間「私」の心の中に存在し続ける。「私」と園子は次第に仲を深めていくが、この関係の構築が3章から4章にかけて重要な意味を持つ。

はじめて園子と会ったときに彼女の足に美しさを感じた「私」は、見た目の美しさだけを感じており、そこに女の肉体としての魅力は感じてはいなかった。

このとき「私」に欠けているのは、「女の裸体を見たいという何らの欲求」であり、欲求がないことを悟られないために自分は「理性の勝った人間」、「女に飽き果てた男」として考えるようにしていた。この自己暗示がいわば、自分が同級生たちと変わらない存在であると自分自身で認識するための働きだといえる。それは、同性（＝男）に対しての肉慾を抱いた社会の異常者だと公に知れ渡ることを恐れ、社会規範との軋轢を危惧していたからだ。

三日目の夕刻、私はまた園子を訪ねた。玄関先で職人風の男が荷を作つてゐた。長持のやうなものが砂利の上でむしろに包まれ、荒縄で縛られてゐた。それを見ると私は不安にかられた。 297 頁

「私」と園子は出会ってから1年が経ち、親しい関係性になっていった。2人きりで過ごす機会も増え、お互いを恋愛的に意識していた。ただここには大きな差があり、「私」は園子を女（＝異性）という性別ゆえに愛さなければならない対象として意識していた。

戦争は激化し、いつ自分たちも被害に遭い、死ぬのか分からない状況である。そんななか、「私」は園子との将来についてどうするのか答えをだすよう迫られ、ついには「自分が園子を愛してをり、園子と一緒に生きるのでない世界は私にとって一文の価値もないといふ観念に圧倒され」ていく。

そのため「長持ちのようなものが」荒縄で包まれている様子は、園子たちが疎開のための引っ越しを余儀なくされている点からも、戦争が「私」のすぐ近くまで迫っており、死を予感させている。また同時に「園子」のことをどうするのか、関係の進展を求められていることを意味しているだろう。

十九の女の子を前にして、物ほしさうに向うから惚れて来るのを待つてゐるなんて。

どうしてもつとてきばきと攻勢に出ないんだ。お前の逡巡の原因がああ異様な・得体のしれない不安にあることはわかつてゐる。 301 頁

疎開する園子からラブレターを貰った「私」は、人生ではじめてのラブレターに有頂天になるものの、返事を出さないか、すぐに出すかという相反した感情に揺れるのである。長い逡巡の末、結局は手紙を書くのであった。園子に手紙を書くということは、彼女を愛していると認めることと同等の意味を持つとするが、「私」は園子に対して愛していると胸を張って言えないのである。園子だけではなく、女に対して「卑しい希み」つまり「裸かを見たい」という欲求を持ったことがないのだ。「私」が目で追いかけるのは、「うら若い兵士や水兵ばかり」であった。また、このような男たちの裸体を想像するのは容易であった。

「私」は、園子（＝異性＝女）を愛さなければならぬと、強迫にも近いものに脅かされている。聖セバスチャンや近江のように男らしい身体を持ち、彼らに湧いた肉欲的なものが、園子相手には湧かないことを理解し、この状態が社会の異常者になり得ると恐れ、社会規範からの逸脱への「不安」を抱いていた。

早く会ひにゆかなければといふ不安がその日から私を追ひかけだした。 312 頁

『さうだつた、結婚といふこともこの世では在り得るんだ、それから子供といふことも。（中略）』—こんな考へが、私を今日明日にも園子に会はねばならぬという矛盾した決心へ促した。これが愛だらうか？ ともするとそれは、一個の不安が私たちの内に宿るときに、奇体な情熱の形で私たちにあらはれる・あの「不安に対する好奇心」に似たものではなかつたらうか？ 314—315 頁

まるで憑きものがしたやうに、私は別人に、まともな男に、生れかはる筈であつた。

その時こそ、私は憚りなく園子を抱き、私の全能力をあげて彼女を愛することもできる筈であつた。疑惑と不安は限なく拭はれ、私は心から「君が好きだ」と言ひ得る筈だつた。

315 頁

帰宅途中に電車の中でサイレンの音が聞こえ退避となり、網棚に置いてあつた荷物と園子の写真は盗まれてしまう。「私」は早急に園子に会いに行き、彼女を自分のものにしなければならぬ、愛していると言わなければ、自分が異性（＝女）と結婚できる機会を逃すことになるのだ。結婚が「極めて重大な幸福かもしれない」とし、彼女に会おうと決心する。それは、園子との結婚や子供を儲けることが成立するということは、「私」が異性（＝女）を愛している確固たる証拠になり、幼少期になることができないと思っていた大人になること”が実現したと周知できるのだ。今までの“汚穢屋的不安”と“兵士の汗の匂ひ的不安”という「不安」を払拭し、過去のものにす絶好の機会であつた。

凡てが終つたことが私にはわかつてゐた。私の周囲の人たちは凡てが今はじまつたと思つてゐるのに。私もまた周囲のやさしい警戒の気配に身を委ねて、私自身をだまさうとねがつてゐるのに。／それにしても園子の静かな様子が私を不安にした。 323 頁

園子を愛し、性的関係を結び、結婚をする。そうすれば、中学時代の近江に惹かれ、「悪習」に狩りたてられたことは、忘れ去られどこかに葬られるはずであつた。だが、「私」が園子と性的関係を結ぶことは実現せず、彼女との接吻から何も感じず、結婚の申し込みも断るのである。3 章全体において園子（＝異性＝女）を通して起こる「不安」には、自分の性的指向を同級生たちと同じ女性（＝異性）に対するものへ変わらなかったという失意が見られる。

4 章

ふとひろげた頁の一行が私の目に灼きついた。しかし不快な不安に押されて本を閉ぢ、本棚に返した。／あくる日の朝、ふいに思ひ立つと、私は登校の道すがら大学正門にちかいその本屋に立ち寄つてきのふの本を買つた。（中略）きのふよりももつと鮮明な不安をその一行が私に与へた。 337 頁

園子との結婚を断り彼女は別の男と結婚し、日本は終戦を迎え、再び日常に戻ろうとしていた。園子（＝異性＝女）との関係は自ら絶つことができたが、「天然自然の自殺一戦死による死一の希み」は終戦により絶たれてしまった。学生生活に戻つた「私」は日々を「楽天的な気持ちですごし」ていたが、そのとき目に止まり「私」に「不安」を与えた一行が、「…女が力をもつのは、ただその恋人を罰し得る不幸の度合によつてだけである」というものであつた。ここに「不安」を感じるのは、園子からの結婚の打診を断つたことに罪の意識があるからだろう。

この場面は「私」が能動的に行動した側であるため今までの「不安」とは性質が異なっている。しかし、女（＝異性）との関係性について汲み取ることができるだろう。

霜どけのじとじととする径を嫖客たちが、跣足であるくやうな靴音を立てて無言で行き交うてゐた。何の欲望もない。不安だけが、まるでおやつをせきたてる子供のやうに私をせきたてた。 340 頁

「私」は友人の手を借り、女と性的関係を結ぼうとする。早急に女と性的関係を結ばなければ、ここまでに発生していた“汚穢屋的不安”や“兵士の汗の匂ひ的不安”に襲われ続けることになる。その「不安」から逃げようとするがため女（＝異性）から裏切られ、別の「不安」、*“オルレアンの少女的不安”*にぶつかっていく。

女と性的関係を結ぶために「裸婦の写真をじっと見つめて自分の欲望をためす」練習をし、たまに成功が見られるが、そこには「白々しさがあつた」のである。この機会が、いわゆる社会から逸脱しない大人になれる最後であつた。決心して関係を結ぼうとするも「不可能が確定し」て終わる。

私たちはしばらく、またしても無意味な、徒らに堂々めぐりの、不真面目な会話をつづけてゐた。（中略）あの白々しく切り込んで来る覚醒の不安、あの醒めぎはの夢の虚しい悦楽、それらが私たちの心を何か悪質の病菌のやうに蝕んでゐるさまを私は見出した。 355 頁

それにしても名状しがたい私の不安が園子にいつのまにか伝染つてをり、しかもこの不安の気配だけが私たちの唯一の共有物であるかもしれない事態を、突然明証が私の目につきつけさうに思はれる。園子はまたかう言つた。私は聞くまいとした。しかし私の口が軽佻な受けこたへをするのである。 357 頁

大人になった「私」と園子は再会し1年ほど逢引を続けていたが、彼女からやめようと提案される。このまま逢瀬を続けることは、園子はすでに結婚していること、愛する夫がいるため難しいのである。それは、このまま続けていたら「何かぬきさしならないところへ追いこまれる」という考えからであつた。園子と会い続けるということは、「火遊び」つまり不倫関係であることを認めることになる。自分を「悪い女」だと思い、「受洗する決心をした」彼女は、精神的にも綺麗で主人を愛している1人の女性でありたかったのだ。

一方で「私」は別れの時間が近づいても彼女の存在を忘れてしまうほど、「二十二三の、粗野な、しかし、浅黒い整った顔立ちの若者に」釘付けになっていたのである。「私」は「私」が抱えている「不安」を解消できないまま物語は幕を閉じる。

4. 「不安」から見られたもの

主人公の「私」が「不安」を感じた22場面を見てきた。「私」は幼少期に与えられた3つの

前提、特に「私の生涯の不安の総計のいはば献立表」である「第一の前提」を通して「不安」を常々与えられ最後まで悩まされている。全て同時に発生する場面もあれば、性質が異なる場合もあるが、まず1章では幼少期の経験から「大人になることの不安」、病弱であるため自分は大人になることができないという、拒まれている感覚が芽生え、ここでは最初の「不安」「汚穢屋的不安」が見られた。2章では聖セバスチャンと近江という同性（＝男）から男らしさを受け取り、肉慾を抱いている。両者のようにはなることができないと自覚したときに発生した「不安」と惹かれていることが社会の異常者として捉えられてしまうことへの「不安」、「汚穢屋的不安」と「兵士の汗の匂ひ的不安」が確認できた。3章では、2章で抱いた「不安」を解消しようと園子（＝異性＝女）と関係を結ぼうと奔走するも、不可能という実情に直面する。最終4章では、女と性的関係を結ぼうとするも過去の「不安」である「汚穢屋的不安」と「兵士の汗の匂ひ的不安」が「私」を急かし、もう1つの「不安」、「オルレアン少女的不安」にぶつかり、「不安」を解消できずに終わった。

「不安」の変遷を辿ることにより、幼少期に「私」が抱く「不安」の全てが用意されていたことが見受けられた。「大人になること」、「近江（＝同性＝男）」との関係、「園子（＝異性＝女）」との関係、「死ぬこと」に関わる場面で発生していることが確認できるのである。

結論

『仮面の告白』における主人公「私」のパーソナリティーについて、作品内で頻出する心理描写の「不安」に注目して分析をおこない、その結果「私」の意識が「大人になること」、「近江（＝同性＝男）」との関係、「園子（＝異性＝女）」との関係、「死ぬこと」へ向く場面で「不安」というパーソナリティーが付与されていることが明らかになった。作品に見られる「不安」の数々は、「私」が性的魅力を与えられた対象に自分にはなることができないと自覚によって生ずる感覚のことである。この状態の「不安」「汚穢屋的不安」と同性（＝男）に対して肉慾を持つ自分が異常者なのではないかと意識したときに発生する「不安」「兵士の汗の匂ひ的不安」が「私」を焦らせ、異性に対して本来感じるべきとされる欲望を持ちえない「不安」、すなわち「オルレアン少女的不安」にぶつかるも未解消のままとなった。これらの「不安」が、生まれた瞬間から20代半ばまでの人生を振り返った叙述形式の「告白」というかたちで述べられている『仮面の告白』は「不安」を巡る物語といえる。

最後に「私」に付与された「不安」という描写が他の作品、とりわけ同性愛について触れた作品である『禁色』においてどのような機能を果たすのか整理が必要と思われるため、今後の課題としたい。

なお、底本は『決定版 三島由紀夫全集1』（新潮社）とし、本文引用は全て同著に拠る。また、旧字は新字に改めた。今日では差別的で不適切な語句並びに表現がありますが、作品を尊重して底本での表現をそのまま使用しています。

註

- 1 文明研究所
- 2 「解題」三島由紀夫（2000）『決定版 三島由紀夫全集 1』、新潮社
- 3 川端康成のほかに青野季吉、丹羽文雄、伊藤整、平野謙、福田恒存が選出。『読売新聞』昭和 24 年 12 月 26 日付朝刊
- 4 三島由紀夫による作品解説「これはへどである」、『週刊図書新聞』昭和 24 年 7 月 23 日付
- 5 「今かうした奇矯な書物を書いてゐる」（185 頁）という作中の言葉から、主人公の「私」が作品全体を綴っていると解釈できる。
- 6 花田清輝「聖セバスチャンの顔」（1950）、奥野健男「三島由紀夫論—にセナルシズムの文学—」（1954）、野島勝秀「「拒まれた者」の美学」（1959）が挙げられる。
- 7 武内佳代（2007）「三島由紀夫『仮面の告白』という表象をめぐる—1950 年前後の男性同性愛表象に関する考察—」、『F-GENS ジャーナル』
- 8 平野啓一郎（2023）『三島由紀夫論』、新潮社。
- 9 園子が抱く「不安」など「私」の心情描写ではないものを本稿では除く。
- 10 「私」が幼少期に読んでいた童話に登場する王子の話である。「竜はすぐに、がりがりと王子をかみくきました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くて / \ たまりませんでしたが、それをじつところへて、すっかりきれぎれにされてしまいますと、またふいに、もとの体になつて、ひらりと口の中から飛び出しました。体にはかすれ傷一つついてをりません。竜は、その場へ倒れて死んでしまひました」。「私」は「かすれ傷一つついてをりません」の一行が作品の欠陥だと思い、「またふいに」から「竜は」までを手で隠し、理想のかたちである竜に傷つけられた王子がそのまま死んでしまう物語に変えて読んでいた。
- 11 佐藤秀明（2020）『三島由紀夫 悲劇への欲動』、岩波新書。
- 12 同前。
- 13 丸太を鉄鎖で低く吊り上げて前後に揺れ動くようにして、その上に乗って遊ぶようにしたもの。
- 14 勃起。
- 15 このとき「私」が見たのは、イタリア・ゼノアにある邸宅パラッツォ・ロッソに所蔵されているグイド・レーニ作の聖セバスチャンの絵である。
- 16 射精。
- 17 『金閣寺』（1956）にも似たような文脈で「人生」が書かれている。『金閣寺』では主人公の溝口が、友人柏木の下宿先の娘と性的関係を結ぼうとする際に金閣に拒まれ、「人生に触れることは不可能である」と悟る。「人生」と「私」が性的関係を結べるかという表現について、今後の課題としたい。